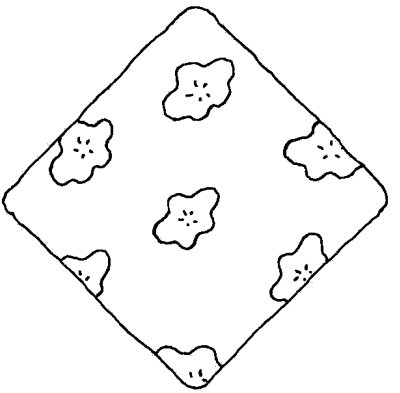
乙女島のおとめ

田中小実昌

乙女島のおとめ



番町書房

乙女島のおとめ

定価は、カバーとオビに表示してあります。

昭和四十九年九月十五日　初版発行

著者　田中小実昌

発行者　村川修二郎

印刷　松濤印刷株式会社

製本　有限会社明泉堂

発行所　（主婦と生活社内）
番町書房

東京都中央区京橋三―五　〒一〇四　TEL（五六七）
〇三一一振替東京一五八四四　©一九七四　田中小実昌

乙女島のおとめ　目次

乙女島のおとめ　7
しろい川で　55
純情二重奏　91
海をさがして　129

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

港のある町で　161
海と赤提灯　191
お女郎さん　223
闇の道行き　255

装幀　和田　誠

乙女島のおとめ

乙女島のおとめ

川の水面を、たくさんの水澄ましがくるくるまわって泳いでいるようだった。そんなふうに、川の表面のあちこちに、無数のまるい波紋ができている。

しかし、この川に水澄ましがいるわけがない。この川は、もうどぶのにおいもしなくなっていた。

どぶのにおいは、ニンゲンの血が腐ったにおい、汚物のにおいだ。

ぼくは、今の翻訳の仕事をする前、米軍の医学研究所ではたらいていたが、この研究所が引越したとき、おびただしい検体の血液を腐らせてしまった。

このとき、さいしょは、女のメンスのようなにおいがしだし、そして汚物のにおい、しまいにはどぶのにおいがしはじめた。

だが、この川にはニンゲンの生理はない。汚れた街のなかを、腐ってぶっちゃばけた腸のように流れてる川だが、腐ったはらわたなら蠅もたかるだろうけど、この川では蠅も死んでしまう。

いや、この川は流れているだろうか。流れてるから川ではないのか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たくさんの水澄ましがくるくるまわって泳いでるように、川の水面にまるい波紋がえがきだされているのは、川の底からたちのぼってくるガスのためだろう。

ガスは、ぷちゅっと川の水面に裏側から毒の針を刺し、かたちだけは、水澄ましがくるくるまわりながらあそんでるような、まるいちいさな波紋をこしらえる。

この川は汚れて窒息(ちっそく)し、その生理組織まで分解し、ただの無機物の死になったのか……。

ぼくは、ぶつくさ、よけいな言葉をならべながら、手にもった、「寿」という字を染めぬいた包みをふりまわし、橋の上をあるいていった。

流れない川の下流の工場の屋根に、赤い月がのっかっている。

この会社の文字がはいってる月で、だから、チーズやピーマンをのっけたピザパイのようにも見えた。

なにかのことで、ぼくが、「荒城の月」と言うと、わらいだした女のコがいた。ポーランド系のアメリカ人を父にもつ女のコで、「工場の月」だとおもったのだ。

しかし、工場の月がおかしいだろうか。この街もあの街も、みんな工場だけならば、月も工場からでるよりしかたがないじゃないか。工場で月をつくるというのはおかしいけど……。

この月は、夜になると赤いネオンがともる。工場の屋根から無機物の死の粘体に（もう水とはいえない）赤いかげをうつすネオンの月。

なのに、ぼくは、意味もなく、サロメの月、サロメの月……とつぶやきながら、橋をわたった。

橋をわたると乙女島だが、まだ乙女島の姿は見えない。
広い通りを、やたらめったら、クルマがはしっていて、だから、広い通りまでが、あせってはしってるみたいだ。
通りの両側には、工場や倉庫がならび、ここにもニンゲンの生理はなく、乙女島の姿は見えない。
ぼくは、寿の字を染めぬいた包みをふりながら、のっぺらぼうのトタン壁の横腹に旭倉庫とペンキでかいた建物の前をとおり、てまえのほうに、四十五度近くの角度でまがりこんでる路地の奥に目をやった。
倉庫の建物の裏に、倉庫や工場とはぜんぜんちがうちいさなうちが見える。乙女島の尻尾だ。飲屋風のせまいカウンターのあるうちがならび、午後三時の、まだ陽が頭の上にある時間に、のれんはだしてないが、客がいる店もあった。
ここを尻尾にして、ほそい路地だけど、旧赤線の格子がはまった家がむかいあった路地がいくつかあり、それが乙女島なのだ。
旧赤線の店の数は、なん十軒ぐらいあるだろうか、しかし、広い国道からも、また、川ぞい、駅のほうの通りからも、乙女島の姿は見えない。
すぐそばまできても、工場や倉庫にかこまれて、その姿はわからないのだ。
だから、あの無機物の死になってしまった川の橋をわたり、広い国道をいくひとも、通りに面し

た工場や倉庫の裏に、そんな街があることは、ほとんどしらない。
ほんと、乙女島は、工場と倉庫にかこまれた離れ島だ。
だけど、やはり、そんなことで、乙女島という名前ができたわけではあるまい。横浜に、もとは中学の教員だったという亭主と（今は、なにをやってるかはしらない）子供がいて、通いでこの乙女島にきていた女が、昔は、ここは島だった、とだれかからきいたと言った。
ここが島だってことは、まわりは海だったのだろう。その海を涸れあげさせ、泥をつめこんで、工場や倉庫や国道をつくったのか。
だったら、そのあと、泥のあいだに、あの川はできたのかもしれない。
あんな川になってしまったのも、もともと生いたちが不幸だったのか。
ぼくは、寿の字を染めぬいた包みのふりかたをえんりょしながら（なにしろ、せまい路地だし）乙女島の路地をあるいた。
倉庫や工場の裏に、ごちゃついて、いびつにおしこまれた旧赤線の軒なみなので、まっすぐな路地はない。
だから、いったり、きたり無駄なまわり道はせずに、乙女島をひとまわりというわけにはいかないのだ。
げんに、入口のよこに丸窓があって、飾りの竹が二本、はすっかいにわたしてあるその丸窓から、頬っぺたのまるい若い女がのぞいている店の前は、もう三度もとおった。

それに、工場の裏塀にぶつかるいきづまりの路地なんかは、いって、ひきかえしてくるよりしかたがない。

なにしろ、工場や倉庫は、裏側を見せて、目の前にそそりたっており、「この路地ぬけられます」と玉の井かなんかみたいに立札をたてたって、だれもダマされまい。

この乙女島は、工場や倉庫の隙間から、女たちがかたつむりみたいに、ちっこいうちをしょって這いこみ、そして、女もふえ、うちもふえて、ごちゃごちゃ繁殖し、赤線の路地になったのかもしれない。

ほんとに、はじめは、屋外便所のような、ただベニヤ板をうちつけただけの小屋に女がおり、それがバラックにかわり、すこしずつ家らしくなって、白木の格子戸がならぶようにもなった。

この白木の格子戸がならぶ軒なみは、赤線がなくなった今ものこっていて、格子戸のかげには夏ならば浴衣姿の女も見え、「絵になるな」と、ぼくはここをあるくたびにつぶやく。

だけど、絵になる、とコトバにすることは、皮肉だろう。

すでに無機物の死に姿を変えた川の底から噴きでるガスが、水澄ましがくるくるまわってあそんでるみたいなかれんな模様を川面にえがくのが無残な皮肉のように、そんな川の近く、工場と倉庫の裏壁におしかこまれた、ふつうなら、雑草も生えしぶるゴミ捨場の空地みたいなところに、絵になる格子戸の色街の店がならんでるというのは、それこそ、絵にかいたような皮肉ではないか。

丸窓にぶっちがいにさしわたした飾りの竹のうしろから、頬っぺたのまるい顔がわかれてうごき、ものを言った。

「この前をとおるの、もう四回目よ。はやく、決心きめなさい」

丸窓とアンサンブルのまるい顔で、ひらいた口もまるかった。口ないしくちびるそのものがまるいというより、この女の口のききかたが、まるまっちい感じだったのかもしれない。

そして、この丸窓のまるさも、なにかとアンサンブルになってるみたいな気がした。あの、流れない川の下流の工場の屋根にのっかってる、赤い、まるい月か……。

それよりも、女が言ったことに、ぼくはクスッとし、店の入口にまわった。

丸窓のうしろにはふみ板があり、その上に素足で立っていた女も入口にひきかえし、ぼくの腕をとった。

だが、階段はせまいので、女は腕をほどき、さきになって、よいしょ、よいしょ、と階段をのぼった。

女は浴衣ではなく、赤っぽいぴらぴらの着物をきており、階段のすぐ上をあがっていくお尻もまるかった。

二階の部屋にはいると、タタミを焼イモにでもしたみたいな熱っぽいにおいがし、女は扇風機をまわした。

「ビール、お酒、ジュース……どれにする？　飲むのは、セットになってるの。しってるでし

ょ？」

女は扇風機の前にたって、まるいみじかい首をうしろによじってたずねた。

ビール、とぼくはこたえ、しばらくすると、また、よいしょ、よいしょ、と声をだして女は階段をのぼり、ビールの壜をよこにしておいたお膳をもってきた。

旅館のような足のついたお膳で、いくつか、ちいさな皿がならんでいる。鉢もあって、その底に青い海草のきれっぱしをしいて、赤貝めいたものが二コ。赤っぽい刺身は、やはりマグロだろうか……これは三きれ。干鱈をちぎったのも皿にはいっていた。それに、みどりの色が褐色にかわりかけた、ぺしゃんこの枝豆が四コばかり皿のなかにならんでいる。

旧軍隊用語ではないが、料理の員数をそろえたというところだ。

ビールがやたら泡がたつのは、壜をよこにしてはこんできたためばかりではあるまい。冷やしてなく、ビールものぼせ、泡をふきだしてるのだろう。

ぼくは、グラスの底をたたいて、グラスにこびりついたビールの泡を口のなかにおとしこもうとした。

「ほら、あの、雨がしょぼしょぼ降る晩に、って歌……しってるだろ？」

ぼくはたずね、女は、ぼくの言葉の意味もわからないらしく、けげんそうな顔で、ビールの壜をとりあげ、泡の上に泡をつぎたした。

「なんだ、しってるのかとおもった」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c